2024年度 入学試験問題

国語

（６０分）

〔注 意〕

① 問題は一～三まであります。
② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入すること。
④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入すること。
⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。

西大和学園高等学校

問題は次のページから始まります。

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

インターネットでは、広告や利用者の囲い込みなどをベースに成り立っているビジネスが多いですが、アテンションエコノミーは、そうした環境で成り立つ経済のあり方のことです。具体的には、情報の内実や質よりも、［　X　］が価値を持つことを指しています。

アテンションエコノミーにおいては、コンテンツ、広告、製品、サービス、ウェブプラットフォーム、オンラインサロン、YouTubeチャンネル、インフルエンサーなどのいずれも、どれくらいの人がそれに注目し、クリック数や購入者数、登録者数、売上などがどれくらい具体的に動いているかという、数量的な「動員」（エンゲージメント）こそが問題になります。

あらゆる人間やイベント、商品などがアテンション（＝注意）を奪うことに最適化していて、それらが私たちの注意を奪い合うだけでなく、私たち自身もSNSの発信を通じて、そうした注意を奪い合う競争に参加しています。

こうした消費環境は明らかに注意の分散に貢献していますが、別に企業や技術だけのせいでもありません。私たち自身が、日夜スマホを通じて注意を分散させる試みに喜んで参加していることを進んで認める必要があるでしょう。スマホを触りながらの対面コミュニケーションでは、相手の会話は薄く聞くだけ、小難しい内容は無視する、何か聞かれたら生返事、そんなやりとりが関の山でしょう。こんな環境で、「消化しきれなさ」「モヤモヤ」「難しさ」の類を抱えておくなんてやってられないとしか思えないはずです。

残念ながら、注意の分散によっておろそかになるのは、対面のコミュニケーションだけではありません。マルチタスク的に処理しているあらゆることが、同時並行している分だけおろそかになっています。漫画を読むことも、電話をすることも、音楽を聴くことも、誰かとテキストをやりとりすることも、全部です。

さらに悪いニュースとして、タークル[注1]が危惧（きぐ）する以上のことが起こっています。つまり、スマホを通じて注意を分散することに慣れた私たちは、スマホを使っていないときでさえ、気もそぞろで対面のやりとりをしているらしいのです。

いくつかの研究がaシサするところでは、スマホを触っていなくても、そこにスマホがあるという事実が、対面の会話に影響を与えている可能性があります。［　A　］には、会話での共感レベルが下がり、話題がスマホに左右される恐れがあり、自他の感情や心理状態への注意が削がれてしまいかねません。

恐らくこのことの背景には、注意の分散があるのでしょう。一つのことに十分注意を向けて、それについてあれこれ考える習慣そのものが衰退しているのだとすれば、やはり〈孤立〉が重要になってきます。

いろいろな事柄や相手に注意が分散しているわけですから、対面での会話が作業するようにこなされてしまうのは当然です。 B

なコミュニケーションで自分を取り巻くことは、相手の人格や心理状態を想像しないようにと日夜練習を積み重ねているようなものです。マルチタスク化した生活がもたらす①〈孤立〉の喪失は、なかなか問題がありそうです。

常時接続の世界では、〈孤立〉だけでなく〈孤独〉もまた失われつつあるという話でした。〈孤立〉は、注意を分散させず、一つのことに集中する力に関係するのに対して、〈孤独〉は、自分自身と対話する力に関わっています。

やはりタークルが、印象深い事例を挙げているので、これを手がかりにしましょう。

先日、仲がよかった友人の追悼式に出席したとき、プログラムが書かれたクリーム色のカードが用意されていた。そこにはbチョウジを述べる人の名前、音楽を演奏する人の名前や曲名、そして若く美しかったころの友人の写真が載っていた。私のまわりの何人かは、そのプログラムで携帯電話を隠し、式のあいだにテキストを送っていた。

その中の1人、60代後半とおぼしき女性が、式のあと私のそばに来て、当たり前のような口調で「あんな長い時間、電話なしで座っているなんて無理ね」と言った。式の目的は、時間をとってその人に思いをはせることではないのか。この女性は、手にして10年にも満たないテクノロジーのせいで、それができなくなっているのだ。

これが〈孤独〉を欠いた状態の一例です。心当たりのある人もいるでしょうか。

実は私自身そうです。祖母の葬式に出て遺体が焼かれるのを待っているとき、スマホを触りたくて仕方がなかったことがあります。そのときの私は、「うまく言えないけど、そうしないほうがいいだろう」と思って、電源を落とし、鞄の奥にしまいました。

代わりに、外の風景をただ眺めたり、近くにいる親戚と何でもない話をしたり、ただ沈黙したり、頭の片隅に浮かんだことを手帳に書いて整理したりしました。ただ、そうしている間も、スマートフォンの電源をつけようか、あるいはテレビのあるところにでも行こうかという思いが頭によぎっていました。

②ここで失われ（かけてい）たものが、〈孤独〉です。退屈に耐えきれず、何か刺激やコミュニケーションを求めてしまう。自分自身と過ごすことができないということです。〈孤独〉という言葉を通して、刺激を求めたり他者への反応を優先したりすることなく、自分一人で時間を過ごすことの重要性が語られているわけですね。

ただし、〈孤独〉といっても、これは「自分自身と過ごすこと」をフラットに指す言葉なので、[C]な含みがないことに留意する必要があります。そうはいっても、悪い印象を持ってしまう人も多いでしょう。その疑問を払拭するためにも、どうして〈孤独〉が必要なのかという問いに、ハンナ・アーレントという哲学者の想像力を借りて迫ってみたいと思います。

アーレントは、「一人であること」を三つの様式に分けています。それが、〈孤立（isolation）〉、〈孤独（solitude）〉、〈寂しさ（loneliness）〉です。この補助線を引けば、多少見通しがよくなり、〈孤独〉と〈孤立〉の関係も見えてきます。順に見ていきましょう。

アーレントは、他の人とのつながりが断たれた状態を〈孤立〉と呼びました。言い換えると、〈孤立〉は、何らかのことを成し遂げるために必要な、誰にも邪魔されずにいる状態を指しています。c ソウゾウ的・生産的なことでなくても、何かに集中して取り組むためには誰かが d カイザイしてはなりません。例えば「何かを学んだり、一冊の書物を読んだりする」ときなどに、「他の人の存在から守られていることが必要になる」ように。

要するに、何かに集中して取り組むために、一定程度以上求められるのが、この物理的な隔絶状態です。この意味で、〈孤立〉は、何かに集中的に注意を向けるための条件になっていることがわかります。

それに対して〈孤独〉は「沈黙の内に自らとともにあるという存在のあり方」だと説明されます。ちょっとおしゃれな言い方でニュアンスを酌（く）みにくいと思いますが、〈孤独〉にあるときの私たちは、心静かに自分自身と対話するように「思考」しているということです。〈孤独〉とは、私が自分自身と過ごしながら、「自分に起こるすべてのことについて、自らと対話する」という「思考」を実現するものなのです。葬式の最中にデジタルデバイスを触りたがる老女は、悲しみを受け止める場を退屈に感じ、「沈黙の内に自らとともにある」ことができていなかったのです。

しかし、人から話しかけられたり、余計な刺激が入ったりすると、自己との対話（＝思考）は中断されてしまいます。この意味で〈孤立〉は、〈孤独〉とそれに伴う自己対話のための必要条件にほかなりません。〈孤立〉抜きに〈孤独〉は得られないということです。

より興味深いのは、「一人であること」の三様式の残りの一つである〈寂しさ〉です。アーレントは、〈孤独〉と〈寂しさ〉を区別するとき、〈孤独〉が〈孤立〉（＝一人でいること）を必要とするのに対して、〈寂しさ〉は、「他の人々と一緒にいるときに最もはっきりあらわれてくる」と述べています。

〈寂しさ〉は、いろいろな人に囲まれているはずなのに、自分はたった一人だと感じていて、そんな自分を抱えきれずに他者を

D に求めてしまう状態です。どうにも不安で、仕事が虚しくて、友人や家族とうまくいかないのが苦しくて、誰にも理解されない感覚があって、退屈を抱えきれなくて他者や刺激を求めてしまう。これに心当たりがない人は恐らくいませんよね。

実際、〈寂しさ〉は E な共同体が崩壊した都市社会に生きる現代人に、宿業（しゅくごう）のようにのしかかるものだとアーレントは考えていました。私たちはみな、③どこにいてもアットホームな気持ちになれない余所（よそもの）者（故郷喪失者）のような心理になる素質を持っており、その気持ちを忘れるために、何かや誰かと一緒にいたいと望む寂しがり屋なのです。

スマホという新しいメディアは、〈寂しさ〉からくる「つながりたい」「退屈を埋めたい」などというニーズにうまく応答してくれます。スマホは、いつでもどこでも使えるだけでなく、スマホを含む様々な情報技術が、私たちのタスクを複数化し、並行処理を可能にしています。コミュニケーションも娯楽もその他の刺激も流し込み、自己対話を止めて感覚刺激の渦に巻き込んでくれるマルチタスキングは、つながりへの欲望も、退屈や不安も覆い隠してくれます。

しかし、〈寂しさ〉からくるマルチタスキングは、いろいろな刺激の断片を矢継ぎ早に与えるものなので、一つ一つのタスクへの没頭がありません。そうすると、ふとした瞬間に立ち止まったとき、「あれは何だったんだ」と虚しくなったり、つながりの希薄さ（つながっていても一人ぼっち）を実感したりすることになります。

常時接続が可能になったスマホ時代において、④〈孤立〉は腐食し、それゆえに〈孤独〉も奪われる一方で、〈寂しさ〉が加速してしまうにもかかわらず、私たちはそうした存在の仕方の危うさに気づいていないように思えます。これまで論じてきた問題点に、スマホというメディアの特性を重ねると、〈寂しさ〉という問題が e ゼンケイ化してくるということです。

（谷川嘉浩『スマホ時代の哲学』による）

【語注】

（注1）タークル … シェリー・タークル。マサチューセッツ工科大学の心理学者。

問一 二重傍線部 a ～ e のカタカナを漢字に直せ。楷書で丁寧に書くこと。

問二 空欄 A ～ E を補うのに最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を繰り返し用いてはならない。

ア 依存的　イ 旧来的　ウ 具体的　エ 反射的　オ 否定的

問三　本文中の空欄［　X　］に当てはまる語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　発信される頻度
イ　人の注目それ自体
ウ　他の広告との差別化
エ　どうやって金を稼ぐか
オ　いかに短時間で伝えるか

問四　傍線部①「〈孤立〉の喪失は、なかなか問題がありそうです」とあるが、筆者がこう考えているのはなぜか。その理由を四十字以内で説明せよ。

問五　傍線部②「ここで失われ（かけてい）たものが、〈孤独〉です」とあるが、「〈孤独〉」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　誰の助けもなくただ一人でいること。
イ　俗世間から離れ自分の志を守ること。
ウ　一人で心を落ち着け自問自答すること。
エ　他から離れて自分だけで生活すること。
オ　他人に適切な距離を取って関わること。

問六　傍線部③「どこにいてもアットホームな気持ちになれない余所者（故郷喪失者）のような心理になる」とあるが、このような「心理になる」のはなぜか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　慌ただしい都会の生活の中で仕事や人間関係に悩み、自分が友人や身近な人たちから理解されないような感覚に陥ってしまうから。
イ　情報技術が発達した現代社会では、どこにいてもオンラインで繋がることが出来きるため故郷と呼べる場所が消失してしまったから。
ウ　他者と繋がることが容易になったことで、コミュニケーションが表面的なものになってしまい皆が他人行儀になってしまっているから。
エ　地域での連帯が失われ、人と人との直接的な繋がりも希薄になってしまった都会では、否応なく自分がたった一人だと感じて

しまうから。

オ　常時スマホに触れていないと平静を保てなくなってしまった現代人は、どこにいても自分の居場所でないように感じるようになったから。

問七　傍線部④「〈孤立〉は腐食し、それゆえに〈孤独〉も奪われる一方で、〈寂しさ〉が加速してしまう」とはどういうことか、八十字以内で説明せよ。

問八　本文の内容を説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　スマホの発達により、様々な情報を得ることがたやすくなり疑問をすぐ解消できる良い環境ができあがった。

イ　葬儀は参列者にとって大切な時間であるので、スマホを使用せず皆で会話をする時間をつくるべきである。

ウ　いつでもオンラインで他者と繋がることが出来る社会だからこそ、自分一人で過ごす時間は重要といえる。

エ　われわれは他者と繋がりを求めて、ＳＮＳなどを利用し続けている今の状況を乗り越えなければいけない。

オ　現代人は情報技術の発達に伴い、同時に二つ以上の物ごとを素早く適切に処理することが可能となった。

二　田舎で椅子工房を営んでいる「徳井 律」と「魚住 光」は、有名建築デザイナー「進藤」に東京の事務所で仕事をするようスカウトされた。椅子の実作業は「徳井」、デザインは「魚住」が担当していたため、「魚住」は技術力のある「徳井」だけがスカウトを受けるべきだと勧めるが、二人は言い争いになり、「魚住」は出て行ってしまった。次の場面は、Ⅰ「徳井」一人で家に帰って来た場面、Ⅱ「徳井」が「魚住」を追って再会する場面である。次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

Ⅰ

「あいつ、なに考えてんだよ」

むらむらと腹が立ってきた。徳井は他人の顔色ばかりうかがっていると魚住はもっともらしく糾弾してみせたが、自分こそ少しは周りの気持ちを考えたらどうなんだ。

「悪気はないんだけどな」

「そういう問題じゃないよ。みんなに心配かけて。ちょっとは周りの迷惑も考えろよな、子どもじゃないんだし」

「律は子どもの頃から、考えすぎるところがあったからな」

のんびりと言われて、徳井はさらにむっとした。

「悪い？」

否定できないのが悔しい。

「悪くはない」

じいちゃんが[a]コンロの火をとめた。

「ただな、ひとりで考えて腹の中にためこむばかりじゃ、体に毒だ」

「じゃあ、じいちゃんはどうなの？」

反射的に、徳井は言い返していた。

「おれがじいちゃんの犠牲になっているんじゃないかって、気にしてくれてたんだってね？　魚住に聞いたよ」

鍋からたちのぼる白い湯気の向こうで、じいちゃんがわずかに目を見開いた。

「おれはそんなふうに思っていないよ。全然、思っていない。でも、じいちゃん、言いたいことがあるんだったら、直接おれに言ってくれればよかったのに。腹の中にためこんないで」

それとも、魚住にだけは本心を打ち明けられるのか？　実の孫には明かせない悩みや屈託も、素直にさらせるのか？

「じいちゃん、魚住と仲いいもんね？　あいつも言ってたよ。おれがついてるから、じいちゃんの心配はすんなって」

ひと息に言い終えたそばから、しまった、と思った。

「おれがついてる？」

じいちゃんがけげんそうに首をかしげた。

徳井が事の次第を説明する間、じいちゃんは腕組みをして耳を傾けていた。

「どうしたらいいと思う？」

ひととおり話した後、徳井の口から自然に質問がこぼれ出た。子どもの頃、友達とけんかしたり、ばあちゃんを怒らせてしまったりして、じいちゃんに助言を求めたときのように。

「律は、どうしたらいいと思う？」

これも昔と同様に、じいちゃんは問い返してくる。

「確かに、いい話だよ。だけど魚住のこともあるし」

しかも引っ越さなきゃいけないし、と徳井は声には出さずにつけ足した。犠牲という一語が、まだ胸の中にわだかまっている。

「とりあえず自分のことだけ考えろ。何度も言うようだけど、お前は考えすぎるところがある」

じいちゃんが徳井と目を合わせた。

「ちょうどいいのかもな、椅子は」

「ちょうどいいって？」

「頭を使って手も動かす。両方やるから、うまいことバランスがとれる。頭と手と、あとはここだな」

じいちゃんが手のひらで胸を［　A　］たたいた。

「どんな気持ちで作るかで、できばえは変わる。上手とか下手とかいうのとは、またちょっと違うけども」

わかるか、というふうに徳井を見る。徳井もじいちゃんを見つめ返した。

「うん」

わかるような気がする。

「律はどうして椅子を作ってる？」

「魚住に誘われたから」
いったん答え、徳井は言い直した。
「いや。楽しいから、作ってる」
「そうだ。ここだよ」
じいちゃんが再び c 胸に手をあてた。
「見てたらわかる。ふたりとも本当に楽しそうだ。そのきっかけを作ってくれたあいつに、お前は恩がある」
徳井は思わず口を挟んだ。
「それは、わかってるよ」
去年の五月から、徳井の生活は一変した。もしも魚住が転がりこんでこなければ、今も徳井は修理屋の仕事をこなしながら、よくいえば平穏な、悪くいえば単調な日々を漫然と過ごしていただろう。
新しい世界につながる扉を、魚住が開いたのだ。
「だから、魚住を見捨てるようなことはしたくないんだ」
①じいちゃんがゆっくりと首を横に振った。
「あいつはそう望んでるか？」
d 「それは……」
徳井はうなだれた。
「恩返しをしたいなら、お前はいい椅子を作り続けるしかないんじゃないか？　どこで作るか、場所は関係なく」
じいちゃんは、正しい。徳井がいい椅子を作ることを、職人として腕を上げることを、きっと魚住も願ってくれている。
「あいつだって、いつまでもすねちゃいない。そのうち X 腹を括るよ」
それに、とじいちゃんはつけ加えた。
「すねてるのは、お前もなんじゃないか？」
「へ？　おれが？」
「ひきとめてほしかったんじゃないか、あいつに」
徳井は小さく息をのむ。

②「なに言ってんだよ？」

かろうじて言ったきり、あとが続かなかった。

もとはといえば、徳井をこの世界に引き入れたのは魚住なのだ。扉を開いたどころではない、強引に腕をつかんで、半ば力任せにひきずりこんだ。それなのに、今さらその手をあっさり離すなんて。ふたりでやろう、とあれだけしつこく繰り返しておきながら。

徳井は立ちあがった。

「ちょっと、行ってくる」

言いたいことは、直接言ったほうがいい。たぶん、お互いに。

「気をつけてな」

じいちゃんが徳井を見上げて微笑んだ。

Ⅱ

驚いたことに、ホテルで徳井と別れた後、魚住はほとんど休みなく歩き続けていたらしい。

「もう慣れたし、そんなに寒くない」

と本人は言うけれど、顔に血の気がないのは夜目（よめ）にも明らかだった。

「家までまだけっこうあるぞ。タクシー呼ぶか？」

徳井は聞いてみた。

「いい。せっかくだから、このまま家まで歩く」

魚住は［　B　］歩き出す。意地を張れる元気は残っているようだ。好きにさせることにして、徳井もあとを追いかけた。

歩きながら、胡桃（注1）に電話をかけた。途中で魚住にかわる。

「ごめん。ほんと、ごめん」

魚住は平謝りしている。

「ホテル出てすぐに、携帯の電池が切れちゃって」

それ以降は地図を確認することもままならず、ひたすら川上をめざして歩くしかなかったという。

魚住が通話を終えた後、徳井はじいちゃんにも連絡を入れた。三十分くらいで帰ると伝え、電話を切ってからふと思いつき、マフ

ラーをほどいて魚住の首に巻いてやった。これも断られるかとも思ったが、魚住はされるがままになっている。やせがまんしていても、やっぱり寒いのだろう。

依然としてひとけのない道を歩きながら、魚住は［C］喋った。

「途中で一回、すんごい雪がひどくなって。その間は、喫茶店に避難してコーヒー飲んだんだ」

徳井が菜摘(ほ2)とふたり、車で帰路をたどっていた頃だろうか。

「ましになってきたから店出て、また歩いて。途中でパトカーとすれ違って、おまわりさんに道聞いて」

話題に上るのは、ホテルからの道中で起きたできごとばかりだった。その前のことには一切ふれない。

「そんで一時間くらい前かな、寒いし腹もへったから、コンビニで肉まん買って食った。今残ってるの、八十四円」

「それも買ったのか？」

魚住のぶらさげているビニール傘に目をやって、徳井はたずねた。

「いや、もらった。夕方くらいに雪が雨になって、酒屋か米屋かなんかの軒先で雨宿りしてたら、店のおばさんがくれた」

魚住が［D］傘を回した。

「そうだ、e雨がやんだ後、虹が出たんだよ。かなりでかいやつ。こう、川をまたぐ感じで」

腕をななめ上に伸ばし、傘の先で宙に弧を描いてみせる。

「めちゃくちゃきれいだった」

「へえ。珍しいな、冬の虹って」

「そっか、確かに。普通、夏の夕立の後とかだよね」

ラッキー、と魚住はうれしそうに笑った。

「おれ、子どものとき、虹の上に座ってみたかったんだよ。って、徳井さんに言ったことあったっけ？」

「ないな」

初耳だった。魚住らしいといえば、魚住らしいが。

「座り心地よさそうじゃない？　眺めもすごそうだし。でも親父には、また夢みたいなことばっかり言って、ってばかにされて。あれも傷ついたね。ま、それでもめげなかったから、こうして今ここにいるわけだけど」

「気持ちいいだろうな。虹に座れたら」

七色のアーチのてっぺんに腰かけ、愉快そうに両脚をぶらぶらさせている魚住の姿が目に浮かぶ。その隣に座ったら、どんな景色が見えるのだろう。

f 深呼吸をひとつしてから、徳井は口を開いた。

「おれ、断るよ」

Y 魚住が だしぬけに立ちどまった。半歩先に出た徳井も足をとめ、後ろを振り向いた。

薄暗い道の真ん中で、ふたり向かいあう。

「どうして？」

魚住が言った。さっきまでとは一変して、声も表情もこわばっている。

「おれのことは気にしないでって言ってるのに……」

「気にしてない」

徳井はさえぎった。

「魚住のせいじゃない。おれが、そうしたいんだ。これからも魚住とふたりで、椅子を作りたい」

徳井が椅子を作るのは、楽しいからだ。魚住と一緒に椅子を作るのが、楽しいからだ。胡桃にも指摘されたとおり、徳井も魚住も、まだ一人前の職人とはいえない。未熟なふたりだけで工房を運営していくのは、確かに大変だろう。でも、やってみたい。少しずつでも前に進んでいけばいい。魚住の苦手とする細かい加工を、辛抱強く教えよう。なるべく計画どおりに作業を進めていけるよう、工程管理も徹底しよう。反対に、顧客の開拓やら接客やら、徳井のほうが魚住から学ばなければならないこともあるだろう。

そうして地道に経験を重ねていけば、③いつかは虹に座れるかもしれない。ふたり並んで晴れやかな気持ちで世界を見渡せる日が、来るかもしれない。

「いい椅子を作ろう。魚住とおれ、ふたりで」

魚住は身じろぎもせずに、徳井の顔を E 凝視している。徳井も目をそらさなかった。そらすつもりはなかった。

先に動いたのは、魚住だった。

④「好きにすれば」

徳井の横をすり抜けて、小学生みたいに傘を振り回しながら、道の先へと歩き出す。

（瀧羽麻子『虹にすわる』による）

【語注】

（注1）胡桃　…　椅子業界の名門である神林工房の娘。魚住と昔付き合っていた恋人。

（注2）菜摘　…　徳井に好意を抱いている幼馴染。

問一　二重傍線部X・Yの意味を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

X「腹を括る」

ア　失敗した原因を自分自身に問い直すこと

イ　責任を追及して非難すること

ウ　道理を言い聞かせてわからせること

エ　不確実なことにためらうこと

オ　たじろがないように意を決すること

Y「だしぬけに」

ア　予期しないことが起こるさま

イ　少しの間に起こるさま

ウ　ゆるやかに起こるさま

エ　気持ちにゆとりのないさま

オ　興味深いことが起こるさま

問二　空欄［A］～［E］に当てはまる最も適当なものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。

ア　ぽつぽつと　　イ　とんとんと　　ウ　しゃんと　　エ　さっさと　　オ　まじまじと　　カ　くるりと

問三　傍線部①「じいちゃんがゆっくりと首を横に振った」とあるが、なぜか。その理由として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　本当は有名建築デザイナーの工房で働きたいという思いがあるものの、一度決めたことを曲げない性格の徳井に、自分の思いに素直になることが、ずっと応援してくれていた魚住の願いであることを分かってほしいと思ったから。

イ　有名建築デザイナーの工房で働くことを選べば、魚住を見捨てることになるのではないかと思い悩む徳井に、いい椅子を作ることが、単調な生活を変えてくれた魚住への恩返しになるということを分かってほしいと思ったから。

ウ　田舎での魚住の生活が心配で、上京することを躊躇（ちゅうちょ）する徳井に、東京で実力を発揮することが、実力不足で有名建築デザイナーの工房で働けない魚住の無念を晴らすことにつながることを分かってほしいと思ったから。

エ　はじめは椅子作りを単調な修理屋の仕事としか考えられていなかったが、徐々に制作の楽しさを感じはじめた徳井に、東京でも椅子を作り続けることが、制作の楽しさを教えてくれた魚住も喜ぶことを分かってほしいと思ったから。

オ　東京の工房で働けば魚住と一生離れ離れになるかもしれないと危惧する徳井に、知人と離れても自分の夢を追うことが、今まで椅子作りのデザインを担当してくれた魚住が望んでいることだと分かってほしいと思ったから。

問四　傍線部②「『なに言ってんだよ?』」とあるが、このときの「徳井」の思いとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　これからも椅子作りを二人でしようと魚住に説得してほしかった本心をじいちゃんに指摘され、動揺する気持ち。

イ　田舎に残って椅子作りを続けてほしいと魚住に説得してほしかった本心をじいちゃんに同情され、やるせない気持ち。

ウ　魚住が自分のことを心配して家まで追いかけてきてほしかった本心をじいちゃんに言い当てられ、恥ずかしい気持ち。

エ　椅子作りの技術の高さを魚住に認めてほしかった本心をじいちゃんに無視され、見当はずれな意見に呆れる気持ち。

オ　東京の有名建築デザイナーの工房で働くことを魚住に止めてほしかった本心をじいちゃんに非難され、困惑する気持ち。

問五　傍線部③「いつかは虹に座れるかもしれない」とあるが、どういうことか。八十字以内で説明せよ。

問六　傍線部④「『好きにすれば』」とあるが、この時の「魚住」の思いとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　椅子作りの技術面で劣っていると感じていた自分に、突然二人での椅子作りを提案してきた徳井の真意を測りかねて途方に暮れている。

イ　自分の意見を何も聞くことなく、二人で椅子作りをしていくという重大な決断を一人でした徳井の身勝手さに嫌気がさしている。

ウ　誰かの言いなりではなく、自分の意志で椅子作りを二人でしていくという選択をした徳井のことを、言葉とは裏腹に嬉しく思っている。

エ　椅子職人として生きていくという決断をした徳井の覚悟を初めて知り、その成長をあたたかく見守っていこうと決意を固めている。

オ　困難があっても二人で椅子作りをしていこうという前向きな徳井の思いに応えるために、不器用ながらも謝意を示そうとしている。

問七　本文の表現の特徴について説明したものとして、当てはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　波線部**a**「コンロの火をとめた」の「火」は、徳井の情熱を表しており、その「火」が消えることで椅子職人の世界で成功することの厳しさを暗示している。

イ　波線部**b**「腕組みをして」、波線部**c**「胸に手をあてた」という描写は、じいちゃんの厳格な性格と威圧的な態度を強く印象づけている。

ウ　波線部**d**「『それは……』」のような「……」を用いた表現を用いることによって、登場人物の心理に余韻を与え、読者の自由な読み取りを可能にしている。

エ　波線部**e**「雨がやんだ後、虹が出た」という情景描写によって、その後の事態が好転していくであろうことを象徴的に描き出している。

オ　波線部**f**「深呼吸をひとつしてから」という表現は、相手を傷つけないように言葉選びをしている徳井の優しさを描き出している。

問題は次のページに続きます。

三　次の文章は、光源氏を愛する「六条御息所（知らない間に魂が体を離れ物の怪となる）」が、光源氏の正妻である「葵の上（源氏の子を懐妊している）」に憑りついて、出産を妨げようとする場面である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

i まださるべきほどにもあらず、と皆人もたゆみたまへるに、にはかに御気色ありて悩みたまへば、いとどしき御祈祷数を尽くしてA さすがにいみじせさせたまへれど、例の執念き御物の怪ひとつさらに動かず。やむごとなき験者ども、めづらかなりともてなやむ。

う調ぜられて、心苦しげに泣きわびて、

（葵の上）「すこしゆるべたまへや。（加持祈祷をすこしゆるめてください）大将に（光源氏）X 聞こゆべきことあり」

とのたまふ。《　中略　》御几帳の帷子ひき上げて a 見たてまつりたまへば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥したまへるさま、ii よそ人だに見たてまつらむに心乱れぬべし。まして惜しう悲しう思す、ことわりなり。白き御衣に、色あひいと華やかにて、御髪のいと長うこちたきをひき結ひてうち添へたるも、かうてこそらうたげになまめきたる方添ひてをかしかりY けれと見ゆ。《（光源氏が葵の上の手をにぎり、葵の上は涙をこぼす）という文章が入るが、省略した。》

あまりいたう泣きたまへば、心苦しき親たちの御ことを思し、またかく見たまふにつけて b 口惜しうおぼえたまふにやと思して、

（光源氏）「何ごともいとかうな思し入れそ。さりともけしうはおはせじ。iii いかなりとも必ず逢ふ瀬あなれば、対面はありなむ。（父上）大臣、宮（母君）なども、深き契りある仲は、めぐりても絶えざなれば、あひ見るほどありなむと思せ」

と慰めたまふに、

「①いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。c かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂はB げにあくがるるものになむありける」

となつかしげに言ひて、

（物の怪）なげきわび　空に乱るる　わが［Z］を　結びとどめよ　したがひのつま

とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変りたまへり。いとあやしと思しめぐらすに、ただかの御息所なりけり。《　中略　》

すこし御声も静まりたまへれば、隙おはするにやとて、宮の御湯持て寄せたまへるに、かき起こされたまひて、②ほどなく生まれたまひぬ。うれしと思すこと限りなきに、iv人に駆り移したまへる御物の怪どもねたがりまどふけはひいともの騒がしうて、後のことまたいと心もとなし。《(験者たちの加持祈祷によってことなきを得た)という文章が入るが、省略した。》院をはじめたてまつりて、親王たち、上達部残るなき産養どもの C めづらかに厳しきを、夜ごとに見ののしる。男にてさへおはすれば、そのほどの作法にぎははしくめでたし。

v(怨霊になっているとは知らない御息所は)かの御息所は、かかる御ありさまを聞きたまひても、ただならず。かねてはいとあやふく聞こえしを、たひらかにもはた、とうち思しけり。あやしう、我にもあらぬ御心地を思しつづくるに、御衣などもただ芥子(注1)の香にしみかへりたる、D あやしさに、御沐参り、御衣着替へなどしたまひて試みたまへど、なほ同じやうにのみあれば、わが身ながらだにうとましう思さるるに、まして人の言ひ思はむことなど、人にのたまふべきことならねば、心ひとつに思し嘆くに、③いとど御心変りもまさりゆく。

(『源氏物語』による)

【語注】

(注1) 芥子の香にしみかへりたる … 自身は加持祈祷などしていないのに、加持祈祷に使う芥子の香りが衣に香っているということ。

問一 破線部X「聞こゆ」は、「申し上げる」と訳をするヤ行の動詞「聞こゆ」の「終止形」であるが、古文での五十音図の「ヤ行」を、例のように解答欄に答えよ。

例 サ行(さ・し・す・せ・そ)

問二 破線部Y「けれ」は、何形であるか活用形を正しく漢字で答えよ。

問三 二重傍線部a「見たてまつりたまへ（見申し上げなさる）」、b「口惜しうおぼえたまふにや（名残惜しいと思われなさるのだろうか）」、c「かく参り来（このように葵の上のもとに参上する）」の主体（主語）は誰か。次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア　光源氏　　イ　六条御息所（物の怪）　　ウ　葵の上　　エ　親たち　　オ　験者

問四 傍線部A、B、C、Dについて、訳として最適なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

A「さすがにいみじう調ぜられて」

ア　そうは言うもののやはり、ひどく祈り伏せられて
イ　そうは言ってもやはり、たいそう調伏しなさって
ウ　それだけのことはあり、すぐれた加持祈祷を行い
エ　それだけのことはあり、ひどく加持祈祷が行われ
オ　それだけのことはあり、たいそう加持祈祷を行い

B「げにあくがるるものになむありける」

ア　たいそう悪い病気が身体から出る人であったなあ
イ　たいそうあこがれのものになれたのであったなあ
ウ　ほんとうに体を離れさまよい出るものであったよ
エ　ほんとうにあこがれのものとなったのであろうよ
オ　とてもあこがれられる人であり続けたいものだよ

C「めづらかに厳しきを、夜ごとに見ののしる」

ア　珍しくひどいことを、怨霊の出た夜ごとに見てうわさを立てる
イ　珍しくひどいことを、怨霊の出た夜ごとに見て悪しざまにいう
ウ　珍しくりっぱなことを、そのお祝いの夜ごとに見ては罵倒する
エ　珍しくりっぱなことを、そのお祝いの夜ごとに見て騒ぎ立てる
オ　珍しくりっぱなことを、怨霊の出た夜ごとに見て大声をあげる

D「あやしさに、御泔参り、御衣着替へなどしたまひて試みたまへど」

ア　疑わしいので、御息所は髪をお洗いになり、お召物を着替えなどなさって汚れがとれるか、試しなさったが

イ　疑わしいので、御息所は髪をお洗いになり、お召物を着替えなどなさって匂いが消えるか、試しなさったが

ウ　身分が低いので、御息所は髪をお洗いになり、お召物を着替えなどなさって汚れがつくか、試しなさったが

エ　いやしいが、御息所は髪をお洗いになり、お召物を着替えなどなさって匂いがつくよう、試しなさったので

オ　いやしいので、御息所は髪をお洗いになり、お召物を着替えなどなさって匂いが消えるか、試しなさるので

問五　傍線部①「いで、あらずや（いえ、そうではないです）」と、光源氏の推測は違うと言っているが、葵の上に憑りついた物の怪は、どうしてほしいと伝えようとしているのか、十五字以内で説明せよ。

問六　空欄 Z に当てはまる漢字を、本文中から抜き出し一字で答えよ。

問七　傍線部②「ほどなく生まれたまひぬ」を、主語を明らかにして、口語訳せよ。その際、傍線部に含まれるのは「生まる」で、「生む」とは違う動詞であることに注意すること。

問八　傍線部③「いとど御心変りもまさりゆく（いっそう御心が変になっていく）」とあるが、六条御息所がそのようなつらさを感じているのは、何を知ったからか、五十字以内で説明せよ。

問九　波線部 i ～ v について、正しくない解釈がある。次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　i　まだ物の怪が去る時ではないと皆が気を引き締めていると、物の怪が悩み始めたので加持祈祷をして動けるようにした。

イ　ii　他人でさえ葵の上の姿を見たら心乱れるのだから、ましてよく知った人が葵の上を見れば、心乱れるのは当然のことだ。

ウ　iii　たとえどうなろうとも、前世からあなたは、父上と母宮と縁のある間柄なので、めぐり逢う折も必ずあると思いなさい。

エ　iv　人にのり移らせた物の怪どもが、お産を妬んで大騒ぎをする様子はまことに騒々しくて、後産のことが気がかりである。

オ　v　御息所は、葵の上出産の知らせを耳にし、前は危篤だとの噂だったのによくもまあ無事に、と苦々しく思うのであった。

2024年度　西大和学園高等学校入学試験

国　語　解　答　用　紙

240206-10

↓ここにシールを貼ってください↓

受験番号	氏　　名

※の欄には何も書かないこと。

一

問一　a　　b　　c　　d　　e

問二　A　　B　　C　　D　　E　　問三　　※

問四　10　20　30　40

問五　　問六

問七　10　20　30　40　50　60　70　80

問八

二

問一　X　　Y　　問一　A　　B　　C　　D　　※

問二　E　　問三　　問四

問五　10　20　30　40　50　60　70　80

問六　　問七

三

問一　ヤ行（　・　・　・　・　）　問二　形　　※

問三　a　　b　　c

問四　A　　B　　C　　D

問五　10　20　と伝えようとしている。

問六　　問七

問八　10　20　30　40　50

問九

※